

対応・工夫【手立て・支援・指導の工夫・指示の出し方】

対応・工夫の内容	事例番号
<ul style="list-style-type: none"> ・国語「どうやって みを まもるのかな(説明文)」では、「てきが きたら うしろむきになって とげをたてます。」の読み取りにおいて、動きや様子を捉えやすくなるよう、動作化やモデルの提示などを取り入れた。また、状況を捉えやすくなるよう、教師が敵役、児童が身を守る動物役になり動作化することで、様子や動きを表す言葉のイメージ化に迫った。 	事例1
<ul style="list-style-type: none"> ・段階的に書きの支援を行った。 <ul style="list-style-type: none"> ①書き出しの文字を記入: ノートにめあてやまとめを書く際、書き出しの文字だけを教師が記入した。 ②書く場所を枠で示す: どこに書けばよいか分かりやすいように、ノートに枠を書いて示した。 ③なぞり書き: 児童がなぞり書きでノートを取れるように、マーカーペンで文字を記入した(鉛筆、赤青鉛筆の色に合わせてマーカーも色分け)。 	事例2
<ul style="list-style-type: none"> ・気分が高まったときには段ボールハウスを使用する(中に入る)ことを認めた。その際、使用するときには教師に必ず伝えることや使用時間を決めることなど、使用のルールを明確に設定した。 	事例2
<ul style="list-style-type: none"> ・度々指示すること(「静かにする」「話を聞く」「姿勢よく座る」など)は、イラストをうchwに貼るなどして、すぐに提示できるようにした。 	事例3
<ul style="list-style-type: none"> ・行動や態度を認める声かけを頻繁に行った。できてない行動は、やってほしい行動として、非難ではなく、音声を控え、身振り・指さし等を行った。 	事例6
<ul style="list-style-type: none"> ・起立しての音読や黒板の前に出での発表、配り係など、意図的に(正当な理由で)席を離れる行動を設けた。 	事例6
<ul style="list-style-type: none"> ・指示は具体物を用い、一つの内容を一つの言葉で示し、身振りをつけた。 	事例6
<ul style="list-style-type: none"> ・漢字に関しては、穴埋め式を取り入れ、書く量を減らし、一部を書き入れるだけにすることや、正しい方に○を付けるなどに取り組んだ。また、先に読む活動から取り組んで自信をつけ、その後に書く活動に取り組むようにした。 	事例7
<ul style="list-style-type: none"> ・文字の形に注意が向くように、漢字パズル、漢字足し算、形を音声言語化する活動に取り組むようにした。 	事例7
<ul style="list-style-type: none"> ・宿題に関しては、タブレットに入力して提出したり、声で録音したものを提出したりするなど、選択できるようにした。 	事例7
<ul style="list-style-type: none"> ・心情理解に関しては、実際の経験や体験から物事を考え、想起できるようにした。 	事例7
<ul style="list-style-type: none"> ・学校という場所が楽しく安心して過ごすことができる場所だと対象児童が感じられるよう、教師や支援員等との信頼関係を丁寧に築くようにした。 	事例8
<ul style="list-style-type: none"> ・声が聞き取りにくい場合やもう一度言ってほしいときは、必ず励ましの言葉を伝えた上で、教師が手本を見せたり、キーワードを用いてどのように発表すると良いのか伝 	事例8

えたりした。そうすることで、対象児童がもう一度やってみようと前向きな気持ちになれるようにした。	
・授業では、「見て分かる」「〇〇すればできる」のように見通しをもてるような学習活動を設定し、できた、分かったと対象児童が実感できるようにした。	事例8
・体育では、サーキットトレーニング等を授業の導入で行い、粗大運動を高める内容に学級全体で取り組んだ。	事例8
・安心できるルールの共有と自己決定の尊重：離席を禁止するのではなく、「場所・時間・何をするか」を教師に報告すれば教室を出てクールダウンできるルールについて対象児童と合意形成を図った。	事例10
・書字負担を減らす(なぞり書き等)配慮を行い、「できる」経験を増やした。	事例10
・特性を「強み」に変える役割と居場所づくり：「注目されたい」「話すのが好き」という特性を肯定的に捉え、「お笑い係」などの係活動を設定し、クラス内での「価値ある役割」を経験できるようにした。	事例10
・長時間座って話を聞くことが苦手な児童のために、ペアでの話し合い活動や立ち上がったの音読、図工で生きた蟹を見せる、和服で授業をするなど、動きのある活動や児童の興味を引く活動を取り入れた。	事例11
・時間になったら教室に戻れるよう、休み時間にタイマーを持たせた。	事例11
・クールダウンのためにタイムアウトを行い、落ち着いたら児童の気持ちをしっかり聞き取るようにした。	事例11
・問題数を減らした習熟度別のプリントを複数用意し、それぞれが自分の力に合わせて自分のペースで取り組めるようにした。	事例12
・クラス全体を回りながらも対象児童を中心に個別指導を行った。	事例12
・見通しが持てるように、授業のはじめに本時ですることやゴールを明確に示した。	事例13
・発問や指示に対して、質問の時間を設け「ここまで質問はありませんか？」と確認をして次に進むようにした。	事例13
・課題に取り組む場合は、課題の量に合った時間設定をするようにした。終わりまでの時間が視覚的に分かるようにタイマーを活用した。	事例13
・課題が早く終わったらミニ先生をするという役割を対象児童に与えた。	事例13
・生徒の考えを否定しない態度を心がけた。	事例16
・宿題等は、早く登校して学校で行うようにした。	事例17
・勉強をする習慣を確立できるよう、下校後のスケジュールを無理がない範囲で具体的に立てた。	事例17
・課外などで下校時間に変更が出た場合は、再度担任と一緒にスケジュールを立て直す時間を設定した。	事例17
・実習を行う際に、使用する器具に工夫を施し、指先の動きをサポートできるようにした。	事例18
・活動に取り掛かる際は、「自分が今何をしないといけないのか」「やることを小さなタ	事例18

スクに分け、一つ一つ確認しながら行動する」「次に何をするのか分からない時は先生に尋ねる」等を対象生徒と一緒に確認するようにした。	
・実習中に作業でつまずいた時に、「それが『1人で取り組むには難しくて困っている』状況である」と自己理解を促し、困った時の次の行動の方法を教えるようにした。	事例18
・漢字の間違いは、繰り返し練習するようにした。	事例19
・絵を描く活動では、教師が輪郭を太く描いた。	事例19
・デジタルワイヤレス補聴援助システム「ロジャー」活用	事例20
・電子黒板を活用した視覚情報の提示、視覚教材の活用:「今月の歌」における流れる歌詞字幕の提示をした。	事例20
・指差し、手差しの活用:発表者や注目してほしい場所などを指や手で示した。	事例20
・板書の活用:対象児童の発言や授業のキーワードなどを黒板に記し、情報を残すようにした。	事例20